

高温に伴う農畜作物等の技術対策について

令和7年6月27日に気象庁より「長期間の高温に関する九州北部地方（山口県を含む）気象情報」が発表されました。

長崎県では、6月中旬から気温が高くなっており、今後も更に1か月程度は続く見込みです。また、同日に九州北部地方の梅雨明けも発表され、これは平年と比べてかなり早い梅雨明けとなります。

例年以上に暑さが長引く可能性があり、農畜産物への影響や農作業中の熱中症の発生などが懸念されますので、今後の気象情報に十分注意し、下記対策を徹底して下さい。

【共通】

熱中症対策として、高温下での長時間作業を避け、こまめな水分、塩分の補給と休憩を取るよう心掛けること。

特に、高齢者は、のどの渇きや暑さを感じにくい傾向があり、熱中症にかかりやすいことから十分注意すること。

1. 普通作物

【早期水稻】

- (1) 出穂期に当たるコシヒカリについては、高温になると稲体の消耗が早まり、穂への澱粉蓄積速度のバランスが崩れ、白未熟粒の発生や充実不足等、品質・食味に影響を与える。

このため、用水の確保ができる水田では、掛け流し灌水などによる地温や水温の低下対策を講じるとともに、登熟後半に肥料切れとならないよう、施用時期や施用量の適正化に努める。

- (2) 高温条件下ではカメムシ類の被害が多くなりやすいので、発生状況を見極め、薬剤の使用時期を考慮した適期防除に努める。

【普通期水稻】

- (1) 高温により地温や水温が上昇すると、地力窒素の発現が多くなり過繁茂になりやすく、以降の生育バランスに影響を与える。また、未熟有機物の多い水田では、高温によりガスの発生が加速され、根の生育を阻害する。

このため、品種ごと、栽植密度ごとの必要茎数の確保が見込まれ次第、速やかに中干しを実施し、過剰分げつを抑制するとともに、中干し後は、根の活力維持のため間断かん水を実施する。

- (2) 幼穂形成期は、湛水状態を保つことに努め、可能な限り掛け流し灌水を実施し、稲体の消耗を少なくする。
- (3) 穂肥の施用時期が遅くならないよう、幼穂等の観察に努め、施用時期、施用量の適正化に努める。
- (4) 高温・乾燥条件下では、コブノメイガ等の食葉害虫やウンカ類では増殖速度が速まり世代交代が促進され大発生となりやすくなることや、高温により、紋枯病及び穂吸汁性カメムシ類の多発生が懸念される。
このため、発生状況を見極め、適期防除に心がける。
- (5) 出穂期以降の管理については、早期水稻に準ずる。

【大豆】

- (1) 高温条件下では出葉速度が速まる等生育が促進されるので、土入れ等の管理時期を失ないように努める。
- (2) 高温・乾燥条件下では、ハスモンヨトウ等の食葉性害虫の発生や活動が活発になるのでフェロモントラップや圃場観察により発生に留意し、適期防除に努める。
- (3) 開花期には多くの水分を必要とするので、葉が裏返るなど乾燥した圃場ではうね間灌水を実施する。

2. 野菜

【共通】

- (1) 生育中のもの（育苗を含む）は、寒冷紗の高張り等により、降温処理に努める。
- (2) 補植用の苗を準備しておく。
- (3) 薬剤散布は、朝夕の涼しい時間帯に行う。高温乾燥条件下では薬剤散布による葉害が発生しやすくなるので、作業は朝夕の涼しい時間帯に行う。高温乾燥条件が続くとハダニ類、アザミウマ類が発生しやすいので、初期防除に努める。
土壌消毒等の実施にあたっては、高温・乾燥条件に伴う急激な気化による作業者及び周辺への影響が懸念されるため、防護マスクや被覆処理等の安全対策を確実に講じる。
- (4) 水分保持や地温上昇の抑制のため、地温抑制マルチや敷きワラ等を活用する。
かん水施設がある圃場は、積極的にかん水を行う。

【いちご】

- (1) ポット育苗中の苗は、寒冷紗等の高張りにより葉焼けを防止するとともに、午前中の温度の低い時間帯に丁寧に十分量かん水する。極度に乾燥する場合は、

夕方少量のかん水を検討する。

曇天から晴天への急激な天候の変化があると水不足によりしおれることがあるので、天候が急変しそうな時はかん水管理には注意する。

【アスパラガス】

- (1) 午前中から土壌水分の減少が多くなるため、午前中から十分なかん水を適宜行うようにする。
- (2) 適度な整枝を行い、ハウスの妻面、サイド、谷部を極力開放し、風通しを良くして高温対策に努める。
- (3) 寒冷紗被覆等により高温対策を行う。
- (4) スリップス、ヨトウムシ類等の害虫防除に努める。

3. 果樹

【共通事項】

- (1) 敷わら、敷草を行い、土壌水分の蒸発防止に努める。刈り取った草は樹冠下に敷く。土壌の乾燥状態や生育に応じてかん水を行う。特に幼木はこまめなかん水を行う。
- (2) 薬剤散布は、早朝の涼しい時間帯に行う。

【みかん】

- (1) シートマルチ栽培で被覆した園では、早朝に葉の巻き具合や葉色の変化など樹勢の状況を見て、かん水するかどうかを判断する。また、かん水チューブ等によるドリップかん水等により、地表面に直接かん水できるよう配慮する。
- (2) 日焼け果発生軽減のため、炭酸カルシウム水和剤等の散布を行う。
- (3) ハウスみかんでは寒冷紗の被覆を行ない、ハウス内の温度を下げるとともに日焼け果の発生を抑える。現在、収穫中のハウスみかんは、早朝の涼しい時間帯に収穫し、収穫後は果実の鮮度保持に努める。
- (4) 袋かけを行なうかんきつは、早めに実施する。

【びわ】

- (1) 極端な土壌乾燥は、花芽分化が促進され着房過多となり、樹勢の低下を助長するため、充分なかん水を行った後に敷きわら、敷き草を行う。

【なし】

- (1) 高温等により熟期が早まる可能性があるため適期に収穫を行う。また収穫は気温が低い早朝に行う。

- (2) 中晩生品種は高温と土壌の過乾燥が続くとヤケ果や水ナシ果になりやすいので、充分なかん水を行った後に敷草、敷わらを行う。

【ブドウ】

- (1) 土壌の極端な乾燥後の多量の降雨は、裂果の発生を助長するため、過度な乾燥状態とならないように、こまめなかん水により土壌水分を保つ。
- (2) 高温等により果実の減酸が早く着色が遅れるため、果実品質を確認し適期に収穫する。

4. 茶

- (1) 茶園の外周およびうね間の土壌管理として、敷わらや敷草等を行い地表面からの水分蒸散を防ぐ。
- (2) 茶園の周囲の障害物を取り除き、風通しを良くする。
- (3) 茶樹の株元から株内への頻繁なかん水に努める。かん水は朝夕の涼しい時間帯に行う。
- (4) 深耕・裾刈り作業を中止する。
- (5) かん水後には、野草・カヤ等で株元付近をマルチする。
- (6) 既に落葉等の被害を生じ始めた茶園では、かん水時に肥料を溶いて、液肥として株元に施用する。ただし、多肥になると根の活性を弱めるので注意する。
- (7) カンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ等の害虫発生に注意し、適期防除に努める。薬剤散布は、早朝の涼しい時間帯に行う。

5. 花き

- (1) ハウス内が著しく高温になる場合は、可能な限り妻面、側面、谷部を極力開放し、風通しを良くする。また遮光資材被覆や循環扇の利用等により降温対策を行う。
- (2) ヨトウムシ類、ハダニ類、立枯れ病等の発生に注意し、適期防除に努める。
- (3) 薬剤散布は、朝夕の涼しい時間帯に行う。
- (4) 輪ぎく類において、高温に由来する奇形花や開花遅延の恐れがある場合は、消灯と同時に夜間冷房も検討する。
- (5) 露地栽培の小ギクについては、夕方などの涼しい時間帯にかん水する。また、マルチ栽培を実施していない圃場は敷わら・敷草を行い、土壌水分の蒸散防止に努める。

- (6) カーネーション等定植後の苗が枯れた場合は、補植苗を移植する。

6. 畜産

【家畜】

- (1) 飼養密度の緩和や、畜体等への散水・散霧により、家畜の体感温度の低下を図るとともに、換気扇等による送風、換気、寒冷紗やよしずによる日除け、屋根裏への断熱材の設置及び屋根への消石灰の塗布等、畜舎環境の改善を図る。
- (2) 良質で消化率の高い飼料及び清浄で冷たい水を給与する。